
セルフパロディ 藤村蘭子VS西園寺蘭子

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セルフパロディ 藤村蘭子VS西園寺蘭子

【Nコード】

N0726N

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

私は藤村蘭子。実相寺税理士事務所の職員。新規の顧客の記帳指導に行く事になった。

私は藤村蘭子。近藤税理士事務所の職員。「仏の近藤税理士事務所にいる鬼の藤村」と陰口を叩かれるほど怖がられていた。

そんな私が近藤所長の指示で、所長のお嬢さんの実相寺沙織先生じっそうで さあじのところに出向してしばらくした頃だ。

「藤村さん、新規で行って欲しい顧客があるんだけど」

沙織先生が言った。私はまだ仕事に余裕があったので、

「わかりました。早速行ってみます」

とすぐに行動に移った。

顧客の氏名は「西園寺蘭子」さん。あら、私と名前が同じね。

性格きついのかな？ 自分でそんな事思っでどうする、蘭子？

指導がきつくて泣き出すような人よりはいいかも知れないけど。

西園寺さんの事務所は、ウチの事務所から結構離れたところにあった。

どうしてウチに頼んで来たのだろう？

まあ、いいか。そんな事、気にしても仕方ないし。

「すごい貸ビル。家賃が高そうね。儲かってる人なのかしら？」

そんな事を思い描きながら、私は西園寺さんの事務所のドアフォンを押した。

「いらっしやいませ、お待ちしてました」

出て来たのは、私と同年代くらいの綺麗な女性。事務員さんかしら？

「実相寺税理士事務所の藤村です。税務の事で……」

「はい、存じてます。私が西園寺蘭子です。どうぞお入り下さい、藤村蘭子さん」

私はギクツとした。どうして私の名前まで知ってるの？

「あ、あの、実相寺から何かお聞きなのですか？」

私はサツサと奥に歩いて行ってしまふ西園寺さんに話しかけた。

「いえ、別に」

西園寺さんはニコツとして振り返る。

「貴女の守護霊様が教えて下さっただけですよ」

「じゃ、いい？」

私はキョトンとした。

「……」

事務所の奥に入ると、水晶や数珠、お札などが置かれた机があった。

「どつぞ、おかけ下さい」

西園寺さんはこやかに言う。

「は、はい」

うわあ。「占い師」だって聞いてきたのに、これってもしかして……。

「はい、どつぞ」

呆然としてみると、アイスコーヒーを出された。

「好きですよね？」

西園寺さんはニッコリして向かいに座った。

「は、はあ……」

私は自分の顔が確実に引きつっているのを感じていた。

「あと、早く結婚された方がいいですよ」

「は？」

何よ、急に。脅かすつもり？ 私は気を取り直して、西園寺さんを見た。

「貴女は今、好きなのかどうか、迷っている方がいらっしやいますよね？」

「え？」

尼寺君の事？ この人、本物？ 本物の靈感の人？

「その人を逃がしたら、もう一生結婚できません。亡くなったお婆様が心配なさっていますよ」

「……………」

私は気を失いそうなくらい驚いていた。すると西園寺さんは、

「あら、いけない。お客様ではなかったのですよね。ごめんなさい」

「はい……………」

私は居すまいを正した。本物なら、訊いてみたい事がある。

「あ、あの」

私の変化に西園寺さんは気づいたようだ。やっぱり本物だ。

「その人とうまく行くのか、お知りになりたいのですね？」

「はい」

私は真剣な顔で西園寺さんを見た。すると西園寺さんは、

「人間の運命は、決まっているようで決まっています。何事も、貴女次第です。貴女がうまく行くと思えば、うまく行きますよ」

「そ、そうですか」

私は少しだけガツカリした。するとそれもわかってしまったようだ。

「お望みなら、お教え致しましょうか？」

西園寺さんは、悪戯っぽく笑った。私は苦笑いをして、

「い、いえ、結構です」

「そうですね。自分の未来は、自分で切り開くものですから、他人の言葉なんてあまり気にしない方がいいですよ」

でもさつきは、「その人を逃したら、もう一生結婚できません」
て脅かしたのに。

「さつきのは、貴女が迷っていたので、その後押しをただけです。
私が運命を切り開いた訳ではありませんよ」

「はあ……」

怖いくらい見抜かれてしまった。凄い人だ。

「では、本題に入らせていただきますね」

私はやっとそう言って、記帳指導を開始した。

「ありがとうございます」

帰り際に西園寺さんが言った。

「今度は、その彼も一緒に連れて来て下さい。ちょっとその方、優柔不断な感じがしますので」

「はい」

私は笑顔で応じた。

でもなあ。尼寺君、昔から怖がりだから、「霊能者に会いに行く」なんて言ったら、絶対逃げそうだな。

まあ、何とかなるでしょ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0726n/>

セルフパロディ 藤村蘭子VS西園寺蘭子

2010年10月21日23時30分発行